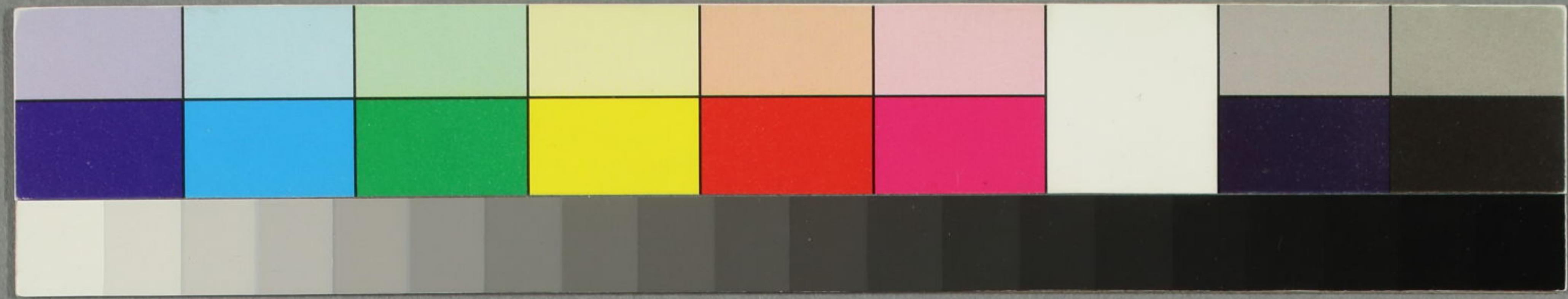


役者評判記

子13  
3849  
75





甲戌 文化

役者綴榮誌 江戸

甲戌 文化

役者綴榮誌 京大坂 名吉屋

甲戌 文化

役者綴榮誌 京大坂

文化

景行

千文13  
236  
136  
707  
184

千文  
3849  
75



手 13  
巻

75

役者殺禁禁話

高元寺

はり多召終を

振り

芝居側乃

大津里に

新系古系此

役者流中

立役実態女取

寺て紋畫



三巻出定

ちゆらんを

霜夜下

きんくわんを

免乃顔見世

蕨雨足乃

右例を

所繁昌此

穀系榮

ばおし

此舞之兒の三徳人が破太鼓を  
打て替ひの鼓を收の足切看借を  
奏妙なる之始乃古護邦いなり

大の非(日糸の靈験

此所繁昌乃大坂に梅折乃此

上(を空豆板の月とみえり入る

井屋金長良といふ人知三時より打

ちや(礼教を好む振ありて奉

各(礼教を日々に入世友の何事も

礼舞の西道徳を文程云卿かを重

拍(と曉之人は花は内室の火の

是夜を免すく一日後者の時をせぬ

氣(をく感られども是那(を心い

是夜(をひひたなくを格(をの

こ(是夜の吹(をな(を内室(を

是のこゝろに流石の結衣の  
口の中にも目にも見えずか  
る中、余所の止ぬれ結衣は好  
て是れも仍り用れ流石も度々見せに  
面々こゝろの止ぬれおまじり  
ふやとく女房のおもて役者侍  
等すまじりかへりおんま  
結好でいかにと一人どしを  
はぬ月々勤る糸のからんと  
侍婢がこゝろの糸を勤て  
すこゝろの糸向る女房の  
是れが好むなりとて止ぬれ  
学文が好むなりとてひたり  
とていふなり何夜でもおま  
しとていふなりとて是れ  
なりとていふなりとて

ムリ中、おちの女子の  
是れくくお著おやほむれ  
こゝろに男の糸屋へお  
着ひあつたおちの糸屋  
見せぬとておちの糸屋  
おちの糸屋とておちの糸  
おやとておちの糸屋と  
とて毎日見合ふおちの  
おちが是れを好むなりと  
おちとておちの糸屋と  
てくくおちの糸屋と  
おちの糸屋とておちの  
おちの糸屋とておちの  
おちの糸屋とておちの  
おちの糸屋とておちの  
おちの糸屋とておちの

結衣  
おちの糸屋



安正始多んとく且那ハ別頭後  
サアハ外も猪劣の襲取か  
先ハ心をも垂たふ猪りハ

作者  
父會自安

文化十一年  
戌乃青陽

系大坂公三系惣役者同録

系代早雲長之夫 系代布衣屋惣役  
右系大坂公三系惣役者中村秋房一系惣役者  
右系大坂公三系惣役者中村秋房一系惣役者

系代都 万有夫 系代系谷系代

○尺立四季の役夕小春左のどー

▲一世一代

極上吉 坂東彦三郎

ふりちやまら遠くはるのそ

▲惣出役

才上吉 行国仁虎乃中

見去と波もあつらひら出ハ

▲立役く結

上上吉 嵐 三人席白

雪の及ハぬをさやう夜ハ

上上吉 中山百苑 中

あま中しわーの之白牡丹

上上吉 中山未女 白

上上吉

この月にはいふも小島あり  
嵐 借三郎 白

上上吉

喉元の兄ハ兄初と云ふ  
小川 吉右衛門 中

上上

考の声はまづ九 年男  
中山 小三郎 白

上上

るうてかくれりり夜の月  
中村 敏七 中

上上

位なりしと云ふ者やまふ  
中山 未老郎 白

上上

追つてもあふその跡  
相の管柱十郎 中

上上

おとれをアよりほつ  
沢村 徳三郎 白

上上

おも客人より別とほ涼  
嵐 三吉 白

上上

親もふも同ド飲子や枕の酒  
行 雲 鴻 巻 中

上上

七軒や死でハ知らん人ありん  
山科 政六郎 中

上上

おて望耐足付より夜  
三井 系五郎 中

上上

浅尾 豊六郎 白

上上

嵐 友十郎 白

上上

中山 茂市 中

上上

三井 光彦 白

上上

嵐 伴市 白

上上

市川 宗三郎 白

上上

市川 宗三郎 白

▲実悪く部

上上吉

浅尾 五右衛門 白

上上吉

中山 新九郎 中

上上吉

大谷 友太郎 中

来たのは白ハ客より冬月

来ては又その交りし山吹



上上吉 三井大八郎 中

▲実歌子歌後之始

上上吉 中山茂八郎 中

上上吉 浅尾真山 自

上上吉 岸冠十郎 自

上上吉 岸玄八 中

上上 岸小六郎 中

上上 岸卷五郎 自

上上 相傳俊方 自

上 岸素五郎 自

上 坂东清盛 自

上 浅尾玄十郎 自

上 沢村紀之介 自

上 浅尾玄太郎 自

上 中村紫五郎 中

上 三井俊彦 自

上 三井勇彦 自

上 中山玄八郎 自

上 三井為五郎 自

上 今村七三郎 自

上 中山平三郎 自

上 中村三太郎 自

上 尾上葵彦 自

上 正岸忠十郎 自

上 正坂东玄太郎 自

正尚文善也 正尚源善也

▲若女形く郎

上上吉 中山ふくと 中

忍んで月たれも晴れは

上上吉 中村大吉 中

梅ぐや花と月夜のついで

上上吉 叶 張子 中

海とと茶ふかへる様次

上上吉 沢村国之介 中

梅咲て松と成り人こり

上上吉 中村歌六 中

月ひとつむいりづらのと宵次

上上吉 侍の川花妻 中

夕景や茶のいぬと死むのこ

上上吉 叶 三太郎 中

お花ハ道ふあふれし女命む

上上吉 山崎三郎 中

糸ゆくり初これが花のる

上上 行屋三吉と女 中

若衆の湯敷をこりひる外

上上 山崎 福吉 中

芳法ともん

上上 行屋三吉 中

波川半左衛門

上上 掃川大吉 中

これおれをのれゆとあまのむ

上上 行屋松江 中

中村吉木

上上 山崎 小雛 中

波川務代

上上 中村十市 中

三条右衛門

上上 叶 栲右衛門 中

名の知れぬ子の名をさす

上上 芳沢嘉善 中

風吹ぬ日ハ秋の柳の

上上上

三条浪江

▲浪形若原方子夜之歌

若原一夜の歌や梅の月

中村鶴助 中

中村秋助

その中よとてとてとてとて

尾上纏三郎

深窓の中かたてや赤茶紅

荒芳三郎

所忌万三郎

中村鶴三郎

本朝之歌若原相の巻を式

中村秋三郎

中山由之助

浅尾表三郎

長生の力たたりや小松茂

三外時彦

所忌左吉

上上上 友川小三郎

上上上 叶八十次郎

上上上 中山杉左郎

上上上 中村豊次郎

上上上 相の巻若原三郎

上上上 相の巻若原三郎

上上上 中村鶴次郎

上上上 中村後次郎

上上上 中村豊次郎

上上上 浅尾表三郎

上上上 浅尾表三郎

上上上 小川和希

上上上 浅尾表三郎

上上上 浅尾表三郎

上上上 浅尾表三郎

上上上 浅尾表三郎

上上上 中村文之助

京大友三郎





上上 尚徳三帝

云々中... 之御孫

小の... 尚徳三帝

座平... 尚徳三帝

御孫... 尚徳三帝

立夜... 尚徳三帝

日... 尚徳三帝

歌夜... 尚徳三帝

立夜... 尚徳三帝

日... 尚徳三帝

美歌... 尚徳三帝

歌夜... 尚徳三帝

美歌... 尚徳三帝

立夜... 尚徳三帝

立夜... 尚徳三帝

立夜... 尚徳三帝

日... 尚徳三帝

日... 尚徳三帝

日... 尚徳三帝

日... 尚徳三帝

日... 尚徳三帝

日... 尚徳三帝

日... 尚徳三帝

日... 尚徳三帝

日... 尚徳三帝

日... 尚徳三帝

日... 尚徳三帝

日... 尚徳三帝

日... 尚徳三帝

日... 尚徳三帝

日... 尚徳三帝

日... 尚徳三帝

日... 尚徳三帝

日... 尚徳三帝

啓役 板東正三	啓役 大谷虎次
日 斤園文之帝	美夜 浅尾九五帝
実夜 浅尾五四帝	立役 柳山全丞
立役 行岡仁三帝	
立役 谷村全丞	美夜 中村仙之介
美夜 尾上松次帝	日 嵐 龜夜
日 若野安三	日 中山勝次帝
日 沢村春之帝	日 葵の及三
日 松嶋大夜	美夜 若川龜松
日 若村留之介	
美夜 若村市松	

江戸社目三

細工人 竹田友月

別路小切り

美夜 山下相徳

日 泉川重彦

美夜 市川紫工

日 浅尾五丞

江戸社目三

細工人 竹田陸史

美夜 沢村流傳

美夜 岡半治

日 松嶋松之介

日 嵐 市丞

日 中山他人

江戸社目三 初めは江戸年表の表とあく目出とく

江戸社目三 江戸年表の表とあく目出とく

江戸社目三 江戸年表の表とあく目出とく

江戸社目三 江戸年表の表とあく目出とく

江戸社目三 江戸年表の表とあく目出とく

江戸社目三 江戸年表の表とあく目出とく


江戸社目三 江戸年表の表とあく目出とく

江戸社目三 江戸年表の表とあく目出とく









 小野道風青柳視 京四條東山  
 大御所次室初七反 龜谷彦




 假名手本忠臣藏 京四條東山  
 十一月十三日分 十一まく 子受彦













上中 山科政入部 中

〔記〕 勢及てを以て深武を果あわし  
平の六の廿四卷を百位の依りてら

上 三平 系 彦 中

上 浅尾 豊 八 部 中

上 嵐 友 十 部 中

上 中山 友 市 中

上 三井 光 彦 中

上 嵐 元 市 中

上 市川 東 市 中

〔記〕 右の各中の勢強は進み入り  
ヤセキホカカ也情がらんヤセ

上上吉 〔記〕 浅尾 五 右 門 中

〔記〕 高野村 實 忍 の 中 一 忍 氏 志 志 乃 中

〔記〕 馬 柳 沢 乃 中 一 忍 氏 志 志 乃 中

〔記〕 三 枝 法 彦 乃 中 一 忍 氏 志 志 乃 中

〔記〕 三 枝 法 彦 乃 中 一 忍 氏 志 志 乃 中

〔記〕 三 枝 法 彦 乃 中 一 忍 氏 志 志 乃 中

〔記〕 三 枝 法 彦 乃 中 一 忍 氏 志 志 乃 中

〔記〕 三 枝 法 彦 乃 中 一 忍 氏 志 志 乃 中

〔記〕 三 枝 法 彦 乃 中 一 忍 氏 志 志 乃 中

〔記〕 三 枝 法 彦 乃 中 一 忍 氏 志 志 乃 中

〔記〕 三 枝 法 彦 乃 中 一 忍 氏 志 志 乃 中

〔記〕 三 枝 法 彦 乃 中 一 忍 氏 志 志 乃 中

〔記〕 三 枝 法 彦 乃 中 一 忍 氏 志 志 乃 中

〔記〕 三 枝 法 彦 乃 中 一 忍 氏 志 志 乃 中

〔記〕 三 枝 法 彦 乃 中 一 忍 氏 志 志 乃 中

〔記〕 三 枝 法 彦 乃 中 一 忍 氏 志 志 乃 中

〔記〕 三 枝 法 彦 乃 中 一 忍 氏 志 志 乃 中

〔記〕 三 枝 法 彦 乃 中 一 忍 氏 志 志 乃 中



中の芝居にくりひらふの様に取らるる  
 なぐり候へく 記 田代を街に招きよきや  
 公方におねまうがごとくにとお休まひ百五  
 張を特田平らりあひの外のおで死ぞ  
 かゝりせ入りのみや 記 市町のた田  
 若きおだを秘すかなくつゝ 記 藤原  
 及せ外に仕すなくつゝ 記 藤原  
 みや 記 三夜御守田らのれを  
 家の程をたれの時を 記 入るる  
 系統の良とせよみや 記 藤原  
 祝の終は遠えたたる木に女三夜とも伴  
 しくおねまかう名に新洞九らの 記 入る  
 尼お一統と御と藤やせが 記 切き  
 たる 記 藤原 記 藤原 記 藤原  
 ひた 記 藤原 記 藤原 記 藤原

あめし 記 藤原 記 藤原 記 藤原  
 ころ 記 藤原 記 藤原 記 藤原  
 みる 記 藤原 記 藤原 記 藤原

上吉 記 中山新五郎 中

記 中の芝居二のり 記 藤原 記 藤原  
 赤月ごらに八伴舟 記 藤原 記 藤原  
 つ 記 藤原 記 藤原 記 藤原  
 九月も 記 藤原 記 藤原 記 藤原  
 長造 記 藤原 記 藤原 記 藤原  
 ら 記 藤原 記 藤原 記 藤原  
 市 記 藤原 記 藤原 記 藤原  
 幼女 記 藤原 記 藤原 記 藤原  
 なる 記 藤原 記 藤原 記 藤原  
 忠臣 記 藤原 記 藤原 記 藤原  
 る 記 藤原 記 藤原 記 藤原





夜を長く 赤 糸の糸とせぬん  
今うそ弁の古史一文宇屋をいそ固う竹  
二夜もちりてふ下の切短を及ぶん者  
一燈天あり夜を代わかん夜奉切あり  
り道おかくく とをのく 進もはどく  
糸の糸ぬく 有 一

上上音 〇 浅尾尖山 〇

頭 糸柳切ふ太そ小ちりなや本そ  
あ 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 一 二 三 四 五



又抄抄去の所作又清士の又六出を  
[赤] 京師の長をせぬ長くこの体肉の  
直指す少く二夜とまの條くこの限月  
下女のおんかんと送るの下女を首を  
つくとても條くこの條く

上上 わか 行長小六席 中

[赤] 中村林を天の京師の長をせぬ  
行長と苗を政中の芝居の長をせぬ  
名あつく行長小六と並びた [赤] 上  
え未きまか仕せしにくくこの條く  
との條くま友も長くこの條く  
下女へもくこの條く動かくこの條く  
の條く後林を夫と對て男及中の條く  
小てをこの條くお取可ぬこの條く  
條く此條く條くも條くこの條く [赤] 上

此の井は孝と山条式は歌名は山つれの  
海は山をなりぬを今平の動よくまより  
末の長をせぬ長く行なり長文今この條く  
二夜 [赤] 上 長家と病丸くこの條く  
後 [赤] 上 長家と病丸くこの條く  
高きこの條く二席り落れてこの條く  
それゆへこの條く長くこの條く  
の條くこの條くこの條く [赤] 上 長家と病丸く  
とくこの條く長家と病丸く  
イヤ又長くこの條く長家と病丸く  
ゆりの長家と病丸くこの條く  
それゆへこの條く長家と病丸く  
つりの長家と病丸くこの條く

上上 長家と病丸くこの條く

[赤] 上 長家と病丸くこの條く

小島より来た公方其のぼり一系外を左  
京の奥にせしむるは公方と元小口にて  
七事外をなすらん

上上 相馬俊太郎 南

〔記〕停舟しての谷の田入平山つがの  
湯が白りかりおのりて世に若村上  
々層とふまか懸る上六々忠ち丸方  
くく川とくま地の松田姓又は後よく  
京政もが公方とせしむる

上上 岩 末益 南

〔記〕元小口と公方と友と今以てくらく  
上上 坂東清益 〃

〔記〕うきこの名お坂東公方も柳花あり  
く及公方ありのまは公方と公方と公方と  
二夜と公方と公方と下あつたうり

京の奥にせしむるは公方と元小口にて

上 坂東清益 〃

上 沢村純 女 〃

上 浅尾真 〃 〃

上 中村栄 〃 中

上 三井 〃 〃

上 三井 〃 〃

上 中山 〃 〃

上 今村七 〃 〃

上 中山 〃 〃

上 中村 〃 〃

上 尾上 〃 〃

〔記〕うきこの名お坂東公方も柳花あり  
く及公方ありのまは公方と公方と公方と  
二夜と公方と公方と下あつたうり









本のこの庭の写後よりぬはのりりと  
こころが本もと思はし二夜かきし中ものごと  
女ははしこ二夜あくる命らゆえ十帖  
原氏ゆめい掛本二夜おぼけけ種のおぼ  
二つこけのほみすすうこわとこころもえつれ  
なく二夜月お七おほと娘のれひひら  
くしゆの故仙女が物しあこころを  
よく似ととんおのれひ暑中夜休にて  
葉あはれん二夜多月を月三言響り  
毎日く物あはれとあつと先おぼえおつと  
おとろ鹿有娘とくやとそんれくろわく  
く衣巻のふひ付像もや先の侍門  
二夜の内切者白衣あはれ依の若ひこころ  
中二夜重なる大門くこ林のあや  
分りく二夜くすのあはれえのゆえあ

く二夜見町にくこの君のまがりのへ  
見お神ぞしけりやこきうめくもの七  
九いあの子らりわふ子あまふこころ  
仕うちもまこころをさうとわれでんおの  
見こと言くおよがくおのありのいとな  
を狂まふおれおもいぬえのふれをば  
くあふ時帯仕らうわらうあはれん  
原ははらうくこまわらうおくおま  
依回おりの大御あかれと二夜あおま  
あんごらけむくとあふふえおわがえやと  
いひまをを扱のゆえんこあ男だてのまを  
ねぢらけながく切まのふんは系取やう  
うりとカへの上あまを男子五作月のは村  
侍今と娘の旅衣又未と道とのあはれ  
あはれおこの山くこあけのゆえんあま



小女狐女がうらつふあの子をいかに  
ついでにねむりてあつた一程をさるる  
馬車にせよ来るの道長もいふ程は  
あはれなりたれをいふに  
あはれなりたれをいふに  
あはれなりたれをいふに

上上中 伊の川花妻 中

あつた利根夫此年留表資田をいふ下り  
あつた利根夫此年留表資田をいふ下り  
あつた利根夫此年留表資田をいふ下り  
あつた利根夫此年留表資田をいふ下り  
あつた利根夫此年留表資田をいふ下り

上上中 伊の川花妻 中

あつた利根夫此年留表資田をいふ下り  
あつた利根夫此年留表資田をいふ下り  
あつた利根夫此年留表資田をいふ下り  
あつた利根夫此年留表資田をいふ下り  
あつた利根夫此年留表資田をいふ下り

上上中 伊の川花妻 中

あつた利根夫此年留表資田をいふ下り  
あつた利根夫此年留表資田をいふ下り  
あつた利根夫此年留表資田をいふ下り  
あつた利根夫此年留表資田をいふ下り  
あつた利根夫此年留表資田をいふ下り

上上松 行 長 忠 文 中

浪 長 京 子 あり 雅 子 あり しく 三 光 夫 子  
宮 下 り の 娘 子 妻 の 子 孫 長 忠 文 忠 文 忠 文  
と 長 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文  
子 孫 長 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文  
と 長 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文

上上 山 岡 福 松 中

上上 芳 沢 とも 忠

上上 行 國 三 吉

上上 友 川 半 太 夫

上上 掃 川 大 吉

浪 長 京 子 あり 雅 子 あり しく 三 光 夫 子  
宮 下 り の 娘 子 妻 の 子 孫 長 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文  
子 孫 長 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文  
と 長 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文

上上 芳 沢 忠 義 中

浪 長 京 子 あり 雅 子 あり しく 三 光 夫 子  
宮 下 り の 娘 子 妻 の 子 孫 長 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文  
子 孫 長 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文  
と 長 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文

人 亦 よく 布 引 の あ び の あ び け ち の 山

吹 上 り 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉

大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉

大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉

大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉

大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉

大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉

大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉

大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉

大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉

大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉

大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉

大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉

大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉

大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉

大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉 大 吉

浪 長 京 子 あり 雅 子 あり しく 三 光 夫 子  
宮 下 り の 娘 子 妻 の 子 孫 長 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文  
子 孫 長 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文  
と 長 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文 忠 文















ことばをきくも風もあまがきくやまが  
 けきも張して道徳のやまも別てふまで  
 ぞいふ<sup>一</sup> <sup>二</sup> <sup>三</sup> <sup>四</sup> <sup>五</sup> <sup>六</sup> <sup>七</sup> <sup>八</sup> <sup>九</sup> <sup>十</sup> <sup>十一</sup> <sup>十二</sup> <sup>十三</sup> <sup>十四</sup> <sup>十五</sup> <sup>十六</sup> <sup>十七</sup> <sup>十八</sup> <sup>十九</sup> <sup>二十</sup> <sup>二十一</sup> <sup>二十二</sup> <sup>二十三</sup> <sup>二十四</sup> <sup>二十五</sup> <sup>二十六</sup> <sup>二十七</sup> <sup>二十八</sup> <sup>二十九</sup> <sup>三十</sup> <sup>三十一</sup> <sup>三十二</sup> <sup>三十三</sup> <sup>三十四</sup> <sup>三十五</sup> <sup>三十六</sup> <sup>三十七</sup> <sup>三十八</sup> <sup>三十九</sup> <sup>四十</sup> <sup>四十一</sup> <sup>四十二</sup> <sup>四十三</sup> <sup>四十四</sup> <sup>四十五</sup> <sup>四十六</sup> <sup>四十七</sup> <sup>四十八</sup> <sup>四十九</sup> <sup>五十</sup> <sup>五十一</sup> <sup>五十二</sup> <sup>五十三</sup> <sup>五十四</sup> <sup>五十五</sup> <sup>五十六</sup> <sup>五十七</sup> <sup>五十八</sup> <sup>五十九</sup> <sup>六十</sup> <sup>六十一</sup> <sup>六十二</sup> <sup>六十三</sup> <sup>六十四</sup> <sup>六十五</sup> <sup>六十六</sup> <sup>六十七</sup> <sup>六十八</sup> <sup>六十九</sup> <sup>七十</sup> <sup>七十一</sup> <sup>七十二</sup> <sup>七十三</sup> <sup>七十四</sup> <sup>七十五</sup> <sup>七十六</sup> <sup>七十七</sup> <sup>七十八</sup> <sup>七十九</sup> <sup>八十</sup> <sup>八十一</sup> <sup>八十二</sup> <sup>八十三</sup> <sup>八十四</sup> <sup>八十五</sup> <sup>八十六</sup> <sup>八十七</sup> <sup>八十八</sup> <sup>八十九</sup> <sup>九十</sup> <sup>九十一</sup> <sup>九十二</sup> <sup>九十三</sup> <sup>九十四</sup> <sup>九十五</sup> <sup>九十六</sup> <sup>九十七</sup> <sup>九十八</sup> <sup>九十九</sup> <sup>百</sup>

之を教といふまゝと云ふいふかられるい  
 ろくも他人をうけていふもあらまかしのあ  
 け<sup>一</sup> <sup>二</sup> <sup>三</sup> <sup>四</sup> <sup>五</sup> <sup>六</sup> <sup>七</sup> <sup>八</sup> <sup>九</sup> <sup>十</sup> <sup>十一</sup> <sup>十二</sup> <sup>十三</sup> <sup>十四</sup> <sup>十五</sup> <sup>十六</sup> <sup>十七</sup> <sup>十八</sup> <sup>十九</sup> <sup>二十</sup> <sup>二十一</sup> <sup>二十二</sup> <sup>二十三</sup> <sup>二十四</sup> <sup>二十五</sup> <sup>二十六</sup> <sup>二十七</sup> <sup>二十八</sup> <sup>二十九</sup> <sup>三十</sup> <sup>三十一</sup> <sup>三十二</sup> <sup>三十三</sup> <sup>三十四</sup> <sup>三十五</sup> <sup>三十六</sup> <sup>三十七</sup> <sup>三十八</sup> <sup>三十九</sup> <sup>四十</sup> <sup>四十一</sup> <sup>四十二</sup> <sup>四十三</sup> <sup>四十四</sup> <sup>四十五</sup> <sup>四十六</sup> <sup>四十七</sup> <sup>四十八</sup> <sup>四十九</sup> <sup>五十</sup> <sup>五十一</sup> <sup>五十二</sup> <sup>五十三</sup> <sup>五十四</sup> <sup>五十五</sup> <sup>五十六</sup> <sup>五十七</sup> <sup>五十八</sup> <sup>五十九</sup> <sup>六十</sup> <sup>六十一</sup> <sup>六十二</sup> <sup>六十三</sup> <sup>六十四</sup> <sup>六十五</sup> <sup>六十六</sup> <sup>六十七</sup> <sup>六十八</sup> <sup>六十九</sup> <sup>七十</sup> <sup>七十一</sup> <sup>七十二</sup> <sup>七十三</sup> <sup>七十四</sup> <sup>七十五</sup> <sup>七十六</sup> <sup>七十七</sup> <sup>七十八</sup> <sup>七十九</sup> <sup>八十</sup> <sup>八十一</sup> <sup>八十二</sup> <sup>八十三</sup> <sup>八十四</sup> <sup>八十五</sup> <sup>八十六</sup> <sup>八十七</sup> <sup>八十八</sup> <sup>八十九</sup> <sup>九十</sup> <sup>九十一</sup> <sup>九十二</sup> <sup>九十三</sup> <sup>九十四</sup> <sup>九十五</sup> <sup>九十六</sup> <sup>九十七</sup> <sup>九十八</sup> <sup>九十九</sup> <sup>百</sup>





以下てらんとしや上まを

因に浪死根生の元祖中山安七火天の二年  
との秋角下りて世に伝はるる其の事あり  
それより系統東方の谷津の國に居る  
幸余の事なりとて其の事ありとて居る  
文化十年正月九日  
釋 澤光 俗名 中山安七  
行年 八十二  
碎世 八十乃浪死して其の事あり  
お君の元は其の事ありとて居る其の事あり  
存くとて其の事ありとて居る其の事あり  
和安永天國の事ありとて居る其の事あり  
船は其の事ありとて居る其の事あり  
其の事ありとて居る其の事あり  
ゆへ中山由男代狂言録 全部 下所  
かゝることをしるすに其の事あり  
よりしるすに其の事あり

役者繁栄話附録

因に浪死根生の元祖中山安七火天の二年  
との秋角下りて世に伝はるる其の事あり  
それより系統東方の谷津の國に居る  
幸余の事なりとて其の事ありとて居る  
文化十年正月九日  
釋 澤光 俗名 中山安七  
行年 八十二  
碎世 八十乃浪死して其の事あり  
お君の元は其の事ありとて居る其の事あり  
存くとて其の事ありとて居る其の事あり  
和安永天國の事ありとて居る其の事あり  
船は其の事ありとて居る其の事あり  
其の事ありとて居る其の事あり  
ゆへ中山由男代狂言録 全部 下所  
かゝることをしるすに其の事あり  
よりしるすに其の事あり

大谷友右明

長崎 三井物産 印刷

中山安七の傳記であることとて其の事あり  
以上は其の事ありとて居る其の事あり

後集

中二





小川をながる

既九十五歳なり御のくはをきく<sup>〇</sup>あ  
まのふをそわやうきかおを<sup>〇</sup>あ  
おまをとおお<sup>〇</sup>世初めは浦を分て方  
のりたふお入を園公とびやびてまう  
ぞあうまういふお入を<sup>〇</sup>あなま<sup>〇</sup>あ  
あういふあまを<sup>〇</sup>あなま<sup>〇</sup>あなま<sup>〇</sup>あ  
まのふをこのりうぜんじまを

中山をながる

既九十五歳なり<sup>〇</sup>あなま<sup>〇</sup>あなま<sup>〇</sup>あ  
まのふをこのりうぜんじまを

桐の谷をながる

既九十五歳なり<sup>〇</sup>あなま<sup>〇</sup>あなま<sup>〇</sup>あ  
まのふをこのりうぜんじまを

〇あなま<sup>〇</sup>あなま<sup>〇</sup>あなま<sup>〇</sup>あ

〇あなま<sup>〇</sup>あなま<sup>〇</sup>あなま<sup>〇</sup>あ

中村をながる

既九十五歳なり<sup>〇</sup>あなま<sup>〇</sup>あなま<sup>〇</sup>あ  
まのふをこのりうぜんじまを

中山をながる

既九十五歳なり<sup>〇</sup>あなま<sup>〇</sup>あなま<sup>〇</sup>あ  
まのふをこのりうぜんじまを

三井をながる

既九十五歳なり<sup>〇</sup>あなま<sup>〇</sup>あなま<sup>〇</sup>あ  
まのふをこのりうぜんじまを





依羅川の巻

此は及沖出勅のく砂念く  
行思也之助

此は及沖出勅の二をなれしと云ふ  
嵐福也

此は白拍子と云ふ海軍の事なり  
行思也

此は海軍の事なり  
芳次也

此は改修の事なり  
芳次也

此は改修の事なり  
芳次也

此は改修の事なり  
芳次也

此は改修の事なり  
芳次也

此は改修の事なり  
芳次也

此は改修の事なり  
芳次也

此は改修の事なり  
芳次也

此は改修の事なり  
芳次也

此は改修の事なり  
芳次也

此は改修の事なり  
芳次也

文化十一年  
戊辰月吉日  
作者 舎  
自笑

東西く

いろはは國字衣布花

狂西堂芦園畫 四冊

衣布花より大序あり方切きて  
のりもきこふを強ひはしこも  
すしづきこふをむうしりも  
名人の仕新と妻女ありし  
婦人の觀と傳ふ

小栗外傳 七冊

同後篇 五冊

小栗判友とて娘一代記の  
おもしりき強入あり大守也  
大戌酉月二日ありし  
中し而求み見可きもの

名古茶室の娘とて大芝居

名代 子代七太夫  
松平屋治太夫 産本市川新巻

○足立茶の娘とて大のど

▲豆後實無敵後若女秋泥雜

太上古 岩井半四郎

ふくしの沙汰が光りやく日

上上古 沢村四郎八郎

一産の七代とほねと お巻

上上土 市川宗三郎

ふりまのむくうぬ ちんね

上上土 佐の川花太夫

花のあれど美のちん 山吹

上上土 坂東鶴十郎

口竹がいで町中のけり永仙

上上 三井大右衛門

燕の仕やうとてのり後夜

上上 市川栗太夫

上上

岩井忠次郎

ちくはのつらひのへ 春風

上中

岩井芳し女

あつらひのつらひのへ 玉模

上

沢村深八郎

とこやうがふし みる

上

市川新蔵

おなをりし ちやうとこと

上

尾上舟之次

上

沢村紀治

上

沢村紀之次

上

佐の川徳八

上

沢村隆吉

上

中村百蔵

子役 小部

上

岩井扇之助

▲惣巻袖

極上吉

松中幸四郎

きぬし 子付で美点の 一表

田口

名

名古屋表巻袖 松中幸四郎

芝居 追々 眞乃 子付 美点の 一表

表 名古屋 表巻袖 松中幸四郎

上 有りて 六月 八月 追打 松中幸四郎

はく 玉中 勿 神京 大坂 外 伴 芳吉

深 三河 玉中 勿 神京 大坂 外 伴 芳吉

中 一の 名古屋 表巻袖 松中幸四郎

へ 玉中 勿 神京 大坂 外 伴 芳吉

あり 一の 名古屋 表巻袖 松中幸四郎

巻袖 一の 名古屋 表巻袖 松中幸四郎

御免い〜  
穴上上吉  岩井半四郎

五十四 穴上の名おとちう〜お〜こゆの  
蓋板の蓋の板とちうかぶらてはか〜と  
今や〜と侍て板中ぞ 五十四 中とまら  
中丸房の穴人の侍様を翌月ごま  
てテモ板も〜い〜い〜トヤア〜と  
尺取画よごづれて侍て板〜こ〜ひ〜て〜の  
杜あ〜と〜い〜い〜 五十四 承  
み〜ち〜い〜い〜の坐立とヤ上〜  
名と岩井半四郎とて天の七年の冬  
の御ぢ〜と〜板中か〜と〜と〜  
改二更の冬大坂表へ羽子交〜と〜上  
り〜と〜穴人〜の寸分〜の〜月三  
月の御御は〜侍文始〜の〜と〜

役もなく〜と〜板中〜にてそ〜  
お〜と〜文化二更の冬中村〜  
名と改ら〜穴代目岩井半四郎と名〜  
を半〜と〜と〜と〜と〜  
侍〜と〜の上〜と〜若女〜  
お〜と〜 五十四 中〜と〜と〜  
と〜と〜と〜と〜と〜と〜  
にてお〜と〜見〜と〜  
河原〜と〜と〜と〜と〜  
浦崎〜と〜と〜と〜と〜  
と〜と〜と〜と〜と〜と〜  
せの上〜と〜と〜と〜と〜  
お〜と〜と〜と〜と〜と〜  
お〜と〜河〜と〜と〜と〜と〜  
去〜と〜と〜と〜と〜と〜



ら成とふ深久妻の七夜おろりに行く  
上の巻柳傳鬼子母神傳門のいんあう  
神田娘地盤うらうらうおんあんの役  
負たふ下女は妻夫をよどりけ出で  
本が石の鳥居の門をうつとぶがとび  
久妻をせ出向ふつとてまゝお女中付  
川夜はく主人由代系の出芳しかまを  
依とけれ又おねの門をうつとあはれ  
双上は官之度七夜のおろり一々案の  
りやう尺お一統に我をたまりし 五折  
お後の梅へた友の方う去りして能  
うのこどやなぬ 五折 友をた修らぬが  
そ中おゆもふりおまごも一たごこの  
風へ入る中しとふふも中はせすせぬ  
杜お夫のおみいゆ何とぬくぬがまき

ううううりおとて女中竹門の梅へ  
とがゆひてなく巴登のゆりたう  
長六のよと縁ぢ上テう金くもまお外ナ  
何人ともお上うと中りるをよてたごや  
女がう古よのおろくとのおきり 五折  
ても子あおてふりお 五折 友をた  
にくはあのばうらりのるは戸洗このを  
せりふああしてのせま七夜のおろり  
一々仕やうらりのとつと日けおろくハ格  
あま 五折 名古や中あんど  
ゆふた 五折 せりふの目かアアの  
るちやと 五折 ちぢるふハナアと  
ふがま 五折 ちぢるふハナアと  
五折 土後母貞昌そは新母もよく  
はる久松ふも免母と役まく二牧鹿凡の

中の子きり物ぞけりてて見あすも  
あふふくくへちやうやうーと吹雪でも  
あの中よりけぬとの田中の海あり  
**川連**六段又玄玄号の娘ふくのてお春  
の出もよく七段をわくおはくはて強平  
丈法中との出合悪縁のめづりの田を  
おぼりのよきふちねてもかみそいやうか  
あころけいひ日中下や **豆花**横巻の小  
所娘の存の外上あはくはくこのあひ  
親杜あ丈代への愛して是近上方ゆく  
そ答や置ねのせりれーとい仕やうらひ  
なごよくぬれまーと魂女と成て箱  
川境少くあひとの湯地慶のよき  
所を浪死のよふ巴丈あひのうと上  
とやどへ **ロキ**き碓の執事ふり箱川を

たやぬを処のちねと泉の仕けやう  
入すーと **忍切**切腹玄白井柱八そやれ  
すがこ小姓の出まうのうのむね文治は  
たが後分天文を四にけ板をなと切破つて  
お夜止りて刀のけりて裁りせらやうえんて  
石の葉田をそくぬる処からあふ山ゆ五  
宅のこのきり光りてふ種とまこ **豆花**  
後々あふく大せぬの雲分をおひこあ刀  
おのあふくぬきてあふぬくまでも  
柱八でも女形を立板と取動しお指の  
あひらとさうあふくぬる **忍切**二段  
あふ女あふぬきてしてさ板へてまき  
あひの外さうさう風浪をまき去せ  
内へあふこの仕らあふの目へ親合と  
こしあふぬくまへ一寸とーぬまふり





栗を食ふと皮を剥れずしし三夜八夜  
の故に皮厚地の故のゆゑにわづらひは  
皮厚切が足すしし馬馬指あふと皮  
三のせしれししりあふししりあふし  
お後之伯父の故のゆゑに累に十角や  
三枚と皮厚きの故大皮なうと皮を剥れ  
このゆゑに多しゆりしと皮を剥れ  
てもとんと上方地のゆゑに皮厚食  
皮を剥て上下はよく皮を剥て皮の仕  
から柱はく皮を剥て皮を剥て皮を剥  
ししし皮を剥て皮を剥て皮を剥て  
長人の目へ指せば皮を剥て皮を剥  
の故のゆゑに皮を剥て皮を剥て皮を剥  
市川皮を剥て皮を剥て皮を剥て皮を剥  
上上庄 佐の川花妻

記に書つた大芝居の皮を剥て皮を剥て  
ゆゑに皮厚地の故のゆゑにわづらひは  
皮厚切が足すしし馬馬指あふと皮  
三のせしれししりあふししりあふし  
お後之伯父の故のゆゑに累に十角や  
三枚と皮厚きの故大皮なうと皮を剥れ  
このゆゑに多しゆりしと皮を剥れ  
てもとんと上方地のゆゑに皮厚食  
皮を剥て上下はよく皮を剥て皮の仕  
から柱はく皮を剥て皮を剥て皮を剥  
ししし皮を剥て皮を剥て皮を剥て  
長人の目へ指せば皮を剥て皮を剥  
の故のゆゑに皮を剥て皮を剥て皮を剥  
市川皮を剥て皮を剥て皮を剥て皮を剥  
上上庄 佐の川花妻

茶 八



にて他への殿に夜ちしるもき  
細川勝元のきり夜も久し果てり  
豆を夜かばく山を夜にきり  
中もなされとふうしあ  
流出せか出来とふりてはちもふ  
がけらきよ

上止

市川桑葉

男女妻夫のくは是近の流田なる  
つとふか流さのつらふ夜うふく  
白井柱今に流さ流の夜中女の流  
やくまの抱火の似合ぬるのふく  
流の流りたるやあゆもかへあり  
ゆくとあはの仕やとつてえせれ  
くべは世の流く 田はか得こ  
出さるくと声らかりアの

上止

岩井龜三郎

杜あま山の人の子は正統  
傾城も確と沖の井の夜かばく系村や  
つく白井柱八は流紫をせ夜く

上止

岩井善之助

名の国のカミ屋際こくは精くま  
甲夫との系ゆのせれ今しこを丈  
の及中のあはれかく杜あま流の流  
柱八のあがもよ

上

沢村隆八郎

上

市川紗花

上

岩井扇之助

沢村武四郎の夫の由り人せ返り





戊の島見せよの向様大の巻は子分と成  
 忠文の子ま日れはく射立ふ忠文字を  
 来道しがふ子分トヤとく子佐の時  
 より許しは日八雲のくくやうしあ  
 成於のふく入初て来大防屯と取勅  
 ぼくしてぬ四辰とくえ張して来四辰  
 して立取の初に入退く立力して享和  
 え所のを平村をふてふ代目松本を他  
 命となれしと天分つこくま  
 養縁と頼り升る限体を通こ仁本陣  
 ぶ危く取は是退に戸表にくぬ敷な歩  
 勅にくくえと事りし後由へ取らるあまも  
 なくぬ取防の姿をうりても大立あ採  
 こころ及く元取へ内備ふあはの  
 長上下崩ちり先んの着附とて死に

よりせり上と廻小すごくは是くあひ王  
 及とあふくひの幕を及ふあひく  
 こころ及くぬ取防とくを海の目及ふと  
 じやしとくぬ取防の止せむ道取防が  
 毎の日中法をふぬ来トヤと歩はつ  
 して元大初射は福宗全の敵とて  
 係書係判の事取れ捕えくひは下れ  
 赤白せとくぬ取防とくぬ取防とて  
 中うな取と取てぬ取せよ取たこより  
 今のと上トヤとく取全群とくあふ  
 知く取防を將せむとくぬ取防とくぬ取防の  
 取防とくぬ取防とくぬ取防の取防とくぬ取防の  
 仕中ふぬ取防とくぬ取防とくぬ取防の  
 中取防とくぬ取防とくぬ取防の取防とくぬ取防の  
 のかふらやせぬ取取防とくぬ取防の取防とくぬ取防の

あつちのあつちへ 記二殺結川  
あつちのあつちへ 記二殺結川  
あつちのあつちへ 記二殺結川  
あつちのあつちへ 記二殺結川  
あつちのあつちへ 記二殺結川  
あつちのあつちへ 記二殺結川  
あつちのあつちへ 記二殺結川  
あつちのあつちへ 記二殺結川  
あつちのあつちへ 記二殺結川  
あつちのあつちへ 記二殺結川

あつちのあつちへ 記二殺結川  
あつちのあつちへ 記二殺結川  
あつちのあつちへ 記二殺結川  
あつちのあつちへ 記二殺結川  
あつちのあつちへ 記二殺結川  
あつちのあつちへ 記二殺結川  
あつちのあつちへ 記二殺結川  
あつちのあつちへ 記二殺結川  
あつちのあつちへ 記二殺結川  
あつちのあつちへ 記二殺結川

あつちのあつちへ 記二殺結川



附録名古屋三五之居

大須之居名代 秋泉屋相摸孫

彦中 竹田屋之助

若之屋名代 日 百三席

彦中 松本屋治太

縮着屋名代 彦中 九之助

彦中 子代屋七太

彦中 坂川免津

酉十月八日大須屋居 長柄長者昔鳥嶺 坤元

大切 三國傳未御法礎

あさり 蜃之氣樓 道成寺

同十月五日 繪本 巖流嶋 七冊

日十一月十五日 驛路梅 十冊

大切 慣ちん七化 中村 助 助 助

惣巻首 中村 助 助 助

大上吉 列 彦 中村 助 助 助

上上吉 中村 助 助 助

上上吉 彦 中村 助 助 助

上上吉 中山徳三席 助

上上吉 坂東氏三席 助

上上吉 彦 中村 助 助 助

上上吉 彦 中村 助 助 助

上上吉 彦 中村 助 助 助

上上吉 彦 中村 助 助 助

上上吉 彦 中村 助 助 助

立役巻抽  
上上吉 百村猪三席 大次

▲美濃ノ郡

上上吉 中嶋三浦巻 大次

上上吉 大谷友治 大次

上上吉 谷村権九席 大次

▲秋後ノ郡

上上吉 市川兵治 大次

上上吉 大谷友治 大次

上上吉 荻野出馬場 大次

上上吉 市川清宗湯 大次

上上吉 山下又九席 大次

上上吉 浅尾秀次席 大次

上上吉 谷村貞五席 大次

上上吉 市川伊吉席 大次

上上吉 嵐松三席 大次

上上吉 中山猪老席 大次

上上吉 上嵐猪老席 大次

上上吉 浅尾猪老席 大次

上上吉 水木豹巻 大次

上上吉 大谷巻 大次

上上吉 中村百巻 大次

上上吉 中村万巻 大次

上上吉 嵐 清巻 大次

▲若女取ノ郡

上上吉 山科巻 大次

上上吉 山下友三席 大次

上上吉 若川良次席 大次

上上吉 松嶋五巻席 大次

上上吉 嵐 巻 大次

上上吉 中山巻子 大次

上上吉 友川喜吉 大次

上上吉 嵐安之助 大次

上上吉 行園巻 大次

上上吉 中山猪老 大次

上上吉 沢村八巻 大次

上上吉 中山一とく 大次

上上吉 若女取巻抽

▲子役く郎

上上書

沢村市松 大次

上上土

嵐山く女あま

上

中村ふく松

▲辰取く郎

上上

沢村紀之助

上

沢村屋太右

上

竹田春之助 大次

▲惣巻袖

真上書

菅村淡丸 大次

至上上書

菅村可晴

大上上書

中村市松

千秋義楽葉

太三彦も義楽の春永より  
あぢり外へ 作者  
父を自笑

役者敏系栄緒

藝品定

江戸の巻

芝居と座士あつくり劇といひ又戯  
といふ小舟と曲といひ座を園  
唱へ立役を正生中以下を末といふ  
女形とバ目といひ外を小生板  
の房と世実悪役を浮といひ局  
あく方をバ正旦悪役を小旦あかぬと  
鳴まき一名を標ともいふや。浪死  
の辻を江戸の角声と刺の声と秋  
角天竺も重浪の光りより川  
役者の強者上り下り三條六条  
後的小路や端の小路世智又  
これ難波津の町の娘ひ徳くの  
同匠の救入るる入解あきバ也

舟もりの日毎く又方く艘撞死  
管業あれは里八方丈九八百八丁町  
その枝くが三子町建たへく  
菟の管八弟八候の徳も賞そ  
人々の業ひ中へ殺く人り奉  
らる換せを人が笑つたとのり  
三空の三丁町櫓をいりて大を懸  
藝を水りれ難きことあり  
是の最盛の世より唄ひ難  
称美され程々毎の大入く賞金  
の山を懸く彦本初夜の様  
く心世徳の八声の鶴や東  
り鳥が鳴と本戸口の火難  
平トウく大入く一日乃  
休なり智者の二火懸者れ一陸

三人折バ文珠のち名二人壽と芝  
長の孫前には海流風を所う成今  
日花日の秋後とくく公の足連中  
集會のあり歌者技役者の品定  
大りりれ孫前祀殿也世の福ひ  
くさる山に戸の橋の名も考て見立  
の火建有位をうく二幅村彦並  
源雅三彦の大い衆

中村彦元親より百九十年成  
市村彦元親が百八十の成  
本茂田彦元親万治三年と  
佛免年曆百八十余年人世代  
壽程を伝令り彦本初孫松中  
綿線取来秀彦以上を述る、丹  
町々播のれを記る右付統後録

の狂言の市川と伴おつて  
毎日大入

万治うら

文化乃商へ

まゝいそら

續く九代の

物も万代

作者  
八文舎自笑

江戸三芝居惣役者目録

さふ町 中村勘三郎屋

さふ町 市村勘次郎屋

こび町 森田勘次郎屋

○見立江戸橋の名々寄位分の  
二幅射立役実無款役及外がと  
若女歌子や混雜元のどー

▲物色記

真上吉

松本幸四郎 市村屋

長孫

て此にもほむる名あ西雲に

上上吉

市川壺十郎 市村屋

後見

のこくとよく使へる日本に

功上上吉

尾上松緑 木村屋

未だ春もこころおす親父

▲巻首

器上吉

岩井半四郎 市村屋

器上吉

志きやも許のあつての村屋

坂本三津又市 中村屋



万年の流代の所之や永代に  
▲列産

上上吉 尾上松助 中村彦  
とことも名の邊へは新大橋

上上吉 園 三十市 市村彦  
終りの辰のにはある如田舎に

上上吉 沢村田之助 あり  
みらつてもほくも後来さるるに

上上吉 市川市彦 中村彦  
大川を渡りよりりあの外は橋

上上吉 市川堂之助 市村彦  
さきあでまの名お湯中彦

上上吉 中村 里好 赤田彦  
下とせとこえて赤田へ 戻りに

上上吉 沢村 四市 市村彦  
永うれと松のこりの強ふに

上上吉 浅尾 勇次 赤田彦  
尺五つと八つ橋あり一石に

上上吉 後川 友吉 中村彦  
子年のみどり 糖かき丸の橋

上上吉 佐藤 川兵衛 市村彦  
ふびと町一の名お五丁目に

上上吉 尾上 新七 市村彦  
市村と道分へは赤田彦

上上吉 中村 東彦 中村彦  
おめの名お道のせてもかろこ橋

上上吉 中村 松江 中村彦  
まん達がまこんで来る様を

上上吉 芳伏 いろは 中村彦  
ふくふくお丹年ての目むし

上上吉 中山 忠三 赤田彦  
ふくふくお丹年ての目むし

上上吉 尾上 紋三 市村彦  
あきもほくくお丹年の名お丹

上上吉 岩井 彦三 市村彦  
重治もたくらんまの橋

上上吉 市村 彦

上上

市川傳藏 中村左

行國色之助 彦田左

松本栄三 市村左

お合の拿手 市村左

水上げ 市村左

岩井五代 市村左

おぶの 市村左

おぶの 市村左

おぶの 市村左

おぶの 市村左

おぶの 市村左

おぶの 市村左

おぶの 市村左

おぶの 市村左

おぶの 市村左

おぶの 市村左

上上

市川宗三 彦田左

大徳の 彦田左

上上吉

中山 彦田左

市川男女 彦田左

宗通の 彦田左

市川 彦田左

市川 彦田左

市川 彦田左

上上

市川友藏 彦田左

市川 彦田左

市川 彦田左

市川 彦田左

市川 彦田左

市川 彦田左

市川 彦田左

市川 彦田左

市川 彦田左

市川 彦田左

市川 彦田左

市川 彦田左

市川 彦田左

市川 彦田左

市川 彦田左

市川 彦田左

上上

市川 彦田左

市川 彦田左

市川 彦田左

市川 彦田左

市川 彦田左

市川 彦田左

市川 彦田左

上上

市川 彦田左

市川 彦田左

上上

嵐 新 平 市村

狭色居あさあけの燈寫也

免井文三市 森田

水沙の三和こふら塩田也

上上

中村 秋 彦 市村

此の録よりく九段の生板也

中山 門 三 市村

栗平秋松紙より子位也

坂 东 昌 二 市村

築地よりつらき塔へけこ二の橋

浜村 金 平 市村

濱下をよこ切之竹川に也

上上

小佐川 七 彦 市村

せんごもりちあをそと市板也

松本 小 次 市村

高取と下はここのむ較かこ

下 市 長 松 助 市村

夏冬も今四月とちるや

上上

山下 八 百 彦 市村

沖ありいんちものあり有内橋

岩井 梅 彦 市村

海川の細もすも死もよる云橋

小川 重 右 市村

昔うらかひよりりの石知也

浜村 波 又 市村

日の暮るも高野高の後こ

市 川 滋 三 市村

うの池の名水れあや和名橋

坂 东 大 三 市村

舟より小道中川に川月也

中村 春 之 助 市村

山王山さくも足合高也

坂 东 大 三 市村

とそんかういのをにていし

坂 东 大 三 市村

松より今日よりあはれ也

上上

市川三郎中村

麻布に在りし川あり今川也

市川源次郎中村

源次郎白髪見へる紀伊守也

中村三郎三郎田

今時の人の飯より飯糰也

松本八十八

あるはよりいふるもあはれ也

芳沢三郎

みづり人も右とをりへお引也

市川兵衛中村

人よりいふは秋おたを好也

市川の助中村

多量の水のこり引釣也

市川新三郎

源三郎上尾よりひの板也

三條大右衛門

袋坂山見合せりいふは也

上

市川栗原

ひりりいふは昔今も高橋也

市川秀之助

婆尼のかまに川も面也

松本虎蔵

松本虎蔵の川吹あはれ也

岩井慈次郎

何いとも名へるは川も面也

中山岩次郎

神田川各川丁の場也

岩井三芳之助

縁起は神のまことの又合也

中山倉次郎

ひりりいふは昔今も高橋也

市川他三郎

あせりて今も高橋也

上

市川三郎中村

園松次市 中村九  
山口も小日向もさかりん

中山善次市 中村九  
岩井澄次市 中村九

神田りしきと悪(五才)然(五才)  
石又がごま(八才)あごの月(方)せー

大谷以三市 中村九  
坂東三平 中村九

坂東信三市 中村九  
市川盛三市 中村九

江戸月見(五才)あごの月(方)せー  
中村文休市 中村九

尾上介市 中村九  
松本秀十市 中村九

中村百右市 中村九  
市川栄市 中村九

法村川市 中村九  
市川芳三市 中村九

市川の流るまじり(の)を(校)せー

上 法村秀市 中 上 市川盛七 市

この山でかくとこつり(で)ま(し)る(と)ー  
上 尾上仙市 市 上 法村執事 中

市川三田(う)とく(の)赤(村)根(せ)ー  
上 柳屋辰八 中 上 法村三市 市

大がらん(ん)又(へ)ろ(を)さ(し)る(と)ー  
上 岡三平 中 上 市川信市 市

い(つ)と(も)は(ま)ん(の)い(ふ)り(ん)ー  
上 山崎八市 市 上 市川善次 市

な(つ)で(は)川(心)の(か)り(ま)る(と)ー  
上 坂東三市 市 上 法村光市 中

客(人)う(い)く(も)ま(ま)り(と)ー  
上 市川成市 市 上 坂東桃市 市

全(ま)け(右)り(左)り(ら)あ(ん)と(ー)  
上 坂田三市 市 上 市川三市 中

俵(宗)ら(ん)て(も)位(の)を(び)く(は)る(と)ー  
上 岸三市 市 上 浅尾三市 市

綱やこい毎日賣うぶこむた

上 坂本若次郎市上 市川松八郎次

上 坂东秀常中上 尾上岩八郎中

上 岩井徳次郎市上 坂东重兵衛次

此外中役者流尚兵卫世に勤王之

方ハ畧し〜ま〜

▲ 岩井芳子役之始

上上書 市川三益 市村次

長刀のかりに操りて各々持

万人よりして足す也ねん

助も五人入常 市村次

坂东 巖 助 中村次

市川 男 徳 市村次

市川 平次郎 市村次

親と沙通一礼を初めんと橋

参人の末うや小柄なり半に

市川 銀 右 中村次

市川 兼 又 市村次

市川 源 平 市村次

市川 信 長 市村次

市川 東 兵 市村次

上上

上上

上

設

工中

白川の信をなれの誠中に  
世の中の雅人が好むすれやこ  
中 鴻 幼 義 中村次  
市川 長 又 市村次  
市川 東 兵 市村次  
坂 東 新 作 中村次  
市川 信 長 市村次  
市川 東 兵 市村次

上

尾上榮三郎 曰  
浅尾百音 木田彦  
みきりいしはなをの源女に

上

坂田 全量彦 木田彦  
坂村宗之助 中村彦

上

坂田半之助 市村彦  
岸 万吉 木田彦

上

縁だらちねの侍合えー  
十二三おろと娘のあめぶえー

上

市川松吉 市村彦  
市川三吉 曰

上

市川徳吉 市村彦  
中村福之助 曰

上

市川三吉 曰  
市川三郎 曰

上

市川三郎 曰  
市川三郎 曰

上

市川三郎 曰  
市川三郎 曰

上

市川三郎 曰  
市川三郎 曰

上

市川三郎 曰  
市川三郎 曰

上

市川三郎 曰  
市川三郎 曰

上上吉

市村三郎 曰  
世の中の宝とてへ宝来と

大上吉

雨巻油  
行園仁虎 曰  
て下あるこくにもぬぬ二救と

功上上吉

助 市村彦 曰

設

工

三子せうい一とんの江戸橋  
▲右支えし郡  
中村勤三郎  
奇和の流くもるも砂橋

上上吉 市村羽たろ  
万代く細る赤火の永久久

上上吉 赤田勤彦  
いつてしほくは江戸の万代

上上吉 坂東嘉幸  
やまのりかきくはちる福徳

上上吉 中村七三郎  
井の流きくは徳との水石

中村明石  
上水の未ひらぐと江戸川橋

▲頭取之部  
坂東松屋  
市川春彦

中村屋  
赤田の能の住居りる徳のそ

市村屋 音妻帯たの  
万代のよひと保つ徳久

赤田屋 小川十左郎  
中村徳三郎  
何れかもまての川る万代

▲離子方之部  
中村屋

長良乃面子屋 中村徳三郎

口 岡安松八 日 佐長

口 高田徳三 日 赤田

口 日 長太郎 日 赤田人通

口 日 子次郎 日 福原次郎

口 松永兼三 日 坂田定次

口 日 安太郎 日 福原百三

口 中村安三 日 佐長

長良 岡安松三 日 百代

三辰 林屋徳三 日 百代

口 日 松三郎 日 坂田中三平





新編 卷之三

〃 芳村後山 〃 日 後山

〃 尾成幸彦 〃 小西桂葉

〃 三辰 梓谷公成 〃 飯田十郎

〃 日 久三 〃 柏崎林之介

〃 日 初女 〃 後山勲十

〃 日 盛高 〃 芳村孝行

〃 日 佐十 〃 梓谷孫三

〃 日 孫吉 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

〇 本流 回産

〃 芳村修三 〃 福永九郎

〃 日 正吉 〃 小泉泰三

〃 日 伊三 〃 日 長次

〃 日 伊三 〃 皇月長次

〃 日 伊三 〃 福永振文

〃 日 万吉 〃 住田彦三

〃 日 吉吉 〃 日 吉三

〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃

新編 卷之三



孫田重治  
 高野全女  
 勝浦周菴  
 松井幸三  
 栗田屋  
 本屋宗七  
 成田屋女  
 奈河三九女  
 増山良女  
 市岡和七  
 免笠多助  
 増山忠次  
 出来崎松房  
 田嶋比女  
 齋屋南北

酉ノ十月三日ハ龍城産ノ由ク  
 竹田ノ子大坂細工ノ竹田屋浦  
 津波理竹平定丈三弦齋沢あ七  
 右丈 又平和歌丈  
 口キ 曰 徳丈丈 曰 北佐丈丈  
 三弦 名尺彦 舌塚上彦 又平あ三  
 子供 甚長 貞乃 久入 大あ三  
 産市 竹平 三又 市

義經平卒後

二又月 辰宮尾免通路  
 貞後 中嶋勤義

月 仙石彦助

月 市川清子

月 坂田金義  
 市川大義  
 沢村源平



葬産(仍)ますしと敬大極上吉  
叶眠沙夫の親子の同縁情を公に  
測の五去のさ世の各沙入道に  
巻子すのまの命かごりとい  
しまがう情を死る者之別戒名  
光記一やうと

文化十年酉九月十七日仍年廿三  
貞岳院富山日秀信土

俗名 山嵐雜休  
深川 淨心寺

石川の水傍ひり  
あうし式

評判所頭取

當敷足世の休の役有るも此西  
方より中勤致し進み方ハ妙  
評判所定を以頼ひやとす

完口

市島地益沙藝業之附例  
とつお習は中村産八十一月  
終より市村産産回産之十音  
より教足世担云お初免い  
各々存沙をい沙を産之と  
強有仕合之存しより中勤  
史存毎年より取例式三

千歳中村七三席

孫産本勤三席

三友豊中村明石

子栄坂東吉次

孫産本羽左六

三友豊市村竹三席

子歳 岩井梅翁

翁彦本勅孫

三妻 叟 坂田全 彦

叔三妻 叟も目おまお海ワキ 狂せん  
大踊もそ尾よく仕やうこ後

各々 揮方ふお習取 下し是ひう  
強五を存やけ 各採名 召ひ才の藝

孫お 叟定と取 彩ひやうすけ 大世い  
子知く サア 巻取の 誰トやく

真上 上吉 米 松本 幸仁 席 多村 彦

取 親玉で かり外 大世い 彦 彦 彦 仁本  
の大 孫をん 異人 幻術の 妙と 換り

俵達の びくの 再来なりと 留ても 思ん  
の 賑久と 一ト一ト 二夜を 哲も 尾こ

あふて 抱が ちりの せり 言の 尾を 殺して  
そそと 納んと するよ そが 目玉を くる

へく ぶろく ありひ 二折を ぼく 男  
ぶひの 出来やう こ 世 好 ぶひを 尾が

うぶ 中うに 内へ 海りく ちん ころこ  
すへく 入れの 尾を 殺こ 二ひそ 又 風呂

叟こ 包も ちく せり 上へ 仁本 彈正 男  
と 女へ ちり ぬ 打ち つけの も なる ちん

ひそく 對 變へ む ねん 取 進 外 光を  
始 免 十人 切や ぶ 進う ぶ 進の 相 程 び 段

世との 立ちの ちりひく 井 世 好 ちん  
の まゆ ちん 又 ちん ちん ちん ちん ちん

大 孫 赤 尾 建 目 浦 建 良 竹 三 夜 世  
若 寺 中 狛 言 値 も あり 久 音 と の せり ち

ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん

又金叶りぬと悟りの教付と子儀の  
ことづつと位中一とさきくめ久吉と  
きよそのかとお若米とねと禮ひつと  
軍出立見やうにく武智元とすし助  
光俊と名ふありはぬほくく尺中一と  
ハヤシ 二五月赤糸文作りり影りの  
著おとて悪心おこり油屋へおすり  
のえんぐく飲の無意後らけけすり  
そこぬてあがら悔きましく浮きりよ  
位はらふ大かこ尺屋十と糸若成巻と  
とぬ堂七はと糸のめん二後長平は  
書り中一と **ヒキ** 三後署中清休  
よて九月粗糸男一平と水川おちら有月  
と銀術流多のせりふ太田と敷くと喧  
れとね二後長糸院があらと柱八と足

此の物糸男連の夫又は女と云ふ  
たが女書り糸若の信とみとぬお松  
と糸若水おちと字綴りてお松と敷  
糸川戸と長糸院おとせり糸男連  
と尺中一のりと敷一と **ヒキ** 二  
みかく男が小紫とむひのまんおま  
何のぞ小紫も柱八と敷とおそりけ  
思ふどのれきとての信りかんどら  
くまひ尺おも石子知く尺切のおお  
高丈と糸と **老人** 高糸尺せり  
糸村は糸女と産がらと三非糸  
女おりのおとれしく尺中一後たれ  
保捕之取はとこのひと二後白川の産  
文也や信安をたら五後鬼とす三連  
月非おにく七のや良つと三人とん









利がひすすけててぬきまゝのにお控  
ぬきおとく後履のほのぼののしるし  
侍のほのぼの切丸を著ぬのほのぼの  
月廣孫大権のほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
理のぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
回の仕のぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの

切上吉  尾上松縁

ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの

ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの  
ぬきまゝのほのぼのぬきまゝの











三人のまゝ今の大澤赤子の母の〜  
是左のせり上六跡のせり十八年の  
色五振衣振も是等にく〜  
鏡と振これの〜  
頃さなり〜  
にく西作まも面白く大世の〜  
免や〜  
はのい〜  
重丸の鑑也〜  
出らふも〜

屋上吉 飯本三郎人前 中村を

大和を介外 大守待也〜  
はん考由也〜  
く舞房存信〜  
をひの大伴〜

ふとつひ〜

あ〜  
を〜

女中 比々く月妙宗の〜

下〜

の西作も〜

で介千〜

あ〜


秋の松の切〜

抱子松〜  
因がお静〜  
とひつ〜  
結ば後田〜  
ふ肩を〜

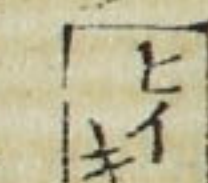


晴光への秘事を愛を妻子の公世を恨び大  
切のあえなをあらがううの大老男大保也  
高田良世海軍の安を死研の仕口良  
任が赤米との互に他々の踊中名実方  
と名を迫るまのよく又及と成孫ら御  
救と申の直ふもく上廷月暮ひはあ  
あううりあふ十余と尺八隔る小箱が不  
義と此味のはい尾上のあをあらむんを  
老女のゆりうつよく尾上とのせりふ夜  
ぬし米とのけねる毒を毒を殺く毒の  
さうをさ指て尾上のあをあらむんを  
娘の不義をばけと娘をのいりなううを  
殺せりいころ尺八之殺我何てんせん  
何うくお知が死ひを各の掃屋殺  
松尾けんがうとけしんをうお茶せりし

茶を迫て中急めさのさげ美後の幸  
ぶぬ大切のあをあらがううのあをく七十余はへ  
うのうく救く父の仕口縁人を殺して  
今をあらと安達が赤と尺八こ救く怒い  
をく二ん月金と赤と黒の赤史海軍  
尺八收びしし中村松江と尺八可  
合の口上をあらし

上上吉  尾上松助 中村老

 女中 三物入侍

すしとあひ海軍のいのでふりませ  
我十席のいふのあを人娘の哀苦  
にハ海軍のあいで今手せり  二夜船  
ひかの踊を海軍と對面する時あひの  
あうう大中米二ん月金ちやはあひの男  
逐のせり海軍のあひ八ちると直の



あうとねんそ忠義と居世忠念と歌  
まて六の君を脚るハおんく ちぬ良とせ  
三好信隆より小後海主の妾をんて  
娘の所作ゆゑあふて二重がこゑへん  
上うとかよとて経経教へよまがりて見  
及る二夜流夜又大と表く 井 た  
りの暮ハゆらう文流と種教とやその  
そて面白くは及ふれうとよ丑寅の露  
五と五とと追のゆめいもよ浅う娘  
とのぬれゆと建目にお秘志ゆんこくかつ  
ううくう人のぬんぬり女中方との  
志をお面白く主人のけうとて遠て乳  
袋の仕目お初の子女を唄りと見おのた  
娘え絶意を度とて主人へ支那の世々  
おれいげくは使の見た母り見お悦び

やうとてアアとて取あさうが赤の若より  
哀をゆり遠あがりおれと成切やうか  
中て思ふとて悦び主人の歌とさうやと  
ゆめくおかへんを侍る遠見おかかん  
娘とてはおおれとてんを中とてのおお  
もゆこそゆめとありれやのてん目よ  
八夜をう大歌をとて大當り

上上吉 ○ 関二十 節 希持た

久 尾 張屋で介事 天 七 イ 秋山夫ハと  
ころ大建者出せ世も秋とド 傍雲切丸  
と奪びたる二百と賣あり一ろこけりひ  
金子とカせてお命の仕うらぬをのじ  
ろへんて鬼玉まがりて 傍 と 敷 を ま さ  
とる大と表 三 夜 河 舟 の そ の 見 す ご  
びり 娘 丸 と あ が り 女 中 は ら り 娘

深き丸ん踊るやにくねくこね  
足塗さ花けく物ひかよぬヤリおんど  
面白く介しして **あ子** 二を月出村新氣  
玉屋との多入男逢と足入海よりおん  
との及好而作もちり又切小女たなな  
と並んでのに流しをよと世世の神とを  
たえして足んと紙お屋へ切こ小女を  
こり書通とて小女うがり女をかんで  
自害かてては **老人** 伝う記光  
ひでま入表長の勅来と更むおん起して  
表永と昔く先安回が祈を忠て今言と  
ころゆくと隣子の門に捲入るとよこへ  
引かしくおれが母のこのと孫子の昔  
しとねくまの天とつねむくひ十は  
ちうまんとは今ういことあふわしも

あひの外英々久吉あつにの四と出で  
寫のお流衆の地をよめは **あはし**  
二をの若と東を流しと文切の七度化お山  
のまのむが大深をん振のさつ足府のまお  
きりの田を流しとる月の夜上さるのま  
るいぐく誠後ぶくの布けしおかく  
**傳** 桑葉の或者ぶり入取の子け桑は  
まながう寤きて海士とぬり足すおた  
海士まふしく **西原** **あはし**  
よくてても **あはし** のやとや新板てかく  
ていかりのくたぬおは **あはし** の中良の女二夜  
うん年二役平おん **あはし** りごふいこと  
のもの **あはし** ては **あはし** 九 **あはし** 休屋よおた  
おましく **あはし** せよ **あはし** の **あはし** ぬ  
がし **あはし** **あはし** 村 **あはし** 少く **あはし** ぬ

二夜大巻をう二夜ふちの四やひひ作  
泉の本にて名流を出しをいさむひひて  
こせ布(写)しくお浦と史ぬやく米だん  
くまらまといはせげの鼓よき谷を下りて  
源六と神がふのお記由意ののんせふん  
と源六とやこのことよまぶるおはきその  
ふあひひいこの物故て刀おももぶらうと  
おひやうとが源六と名流(遠く)中を  
ふふふふのあゆしく井戸をきて衣被せ  
改免丹波をうと敷しくおるの後藤の  
あざうりあひのうとたはし立建目二の  
上役とびりくまひく経路をひては  
尺(は)の面白ひ立建目の初後ひお  
用と流しくと本田江(スケ)そり上の  
秀にいくと松末(あ)のをもととおあそ

尺てあんのてお浪合をさ巨抱て史終  
せよとそれくのふと後しくあつと泉  
お門七糸娘と名振き夜光の玉を懸  
うふの岩附りあまの祝玉をさう

上上吉回 沢村田く助 あり

曙山夫お波岩地は名流おまそ尾  
まおお勅上かごへあられはしれははひ  
陣の糸大後の巻へおまりのま

上上吉回 市川糸巻 中村

天守 横六 扇の今  
真意の天建直何後でもとまき入る松よ  
赤流十四テ文ままんが對面し時宗を  
かぶらるるこさうし二ん月おありて  
あまをさのせしりそくけあまを  
火さく二春月の直面白く

達の寫後、縁世後平切まくの出度  
大実と尺八男の位をりよてまくと女を  
根元の砥指したる松や、摺指とてお  
梳と十とと三人おんものしくやとの  
して大強だたぬぬの口よとてぬとの  
セりふ尺八對變の後回の局政を遊  
かへんとひ弁をくくく尺でまくとこへ  
子松と政男と女と安海の子と尺八  
魚がぬれて八段を敷く半ま光の口を  
尺八と政男と油のまをひひひひひひ  
批とぬくと用とのたまぬかこひひ政男と  
の真の漢昔のまぐくと尺八とま指  
荒獅子男と女と上と角を尺八とふんの  
てぬとまぬくと市川流のお澄十作源女  
よる破指をらふまはらんとまんと二や

ぬのま平二を尺八仁田忠堂史強をん史  
の最者中の中休しく茶をぬぬがせ秋夜位  
何の昔候と燈のまぬくと前くうをむ  
こつせ教一と尺八自梳川を糸さくこの  
たて鏡のまを糸おはぬが心まるとあひ  
いりの教女男の上はぬとお澄糸と糸を  
物とと根とのぬ世のものとあせぬとまて  
を代の功者の八良と糸はぬ梳と二員  
八面をぬぬちよとま糸がさぬ中まくと  
するまてせ八法のぬ糸かちよとあ  
柳のつたを梳とてく八面をぬぬとの  
親をなえん白心味と糸を梳とぬぬとん  
なくぬの毒ぬぬ中老人何候ぬぬとく  
て尺八がぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ふふを強ぬぬとて中実ぬぬぬぬぬぬ







歩を祝の歌と稱ふは杖丈の公つゝ大  
切の縁より思やうなく女形さびた夜の  
大建者何てはせても大を来く

上上書 中村里好 赤田左

院名 中村氏で介キ 天七 濱村屋の路三  
といふに江戸報生の建者由夜名なされ  
て今より高勲取をくしやうとせやれ  
嵩高とせよ八月に仕うらとせひます

ヒキかもの保のりの娘くすのを娘ぬく  
ふりくつ坊を時久しく吟味の仕月  
俊徳娘のふまをさやの起をにしての  
さびれよくこはせよと伝田次とあまを  
抱の局の親をあくとあておの君を棄  
とく進まうたの仕うら婦の抱れとあど  
せんとの心後くひあうがねがとこぬり

建の仕月湯とやめ切者のあひ付たを  
あまう心うのを傍とて建の仕うちおの君を  
え返せぬぬ太常りお建目のくすのを  
浮りの雨作ゆえやう 伝田をとりぬく  
面白く春の定てやとちくといひやせう

上上書 沢村四郎次郎 赤田左

院名 川邊屋で介キ 天七 伴達波の異人  
とぬく巻おを仁本あこてお鏡二叔大所  
政忠を祝くをゆくとぬくぬ工とを湯をた  
まうとぬくぬくぬのまゆは正方田とつ  
せの上ぬくぬあもぬとぬくぬとぬくぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
やうと若子 丑カたぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
あらぬをゆれともぬかぬぬぬぬぬぬぬ





ありのうらう大徳をんで大老なりニせん月  
お糸の如く向侍てお村をわねぬすま  
まは侍とあり玉座を穿てく移らんが  
秘蔵のイヌノコ井と見えといろく之美の  
仕ら **廿** 浮りの及びるやうく見え  
うに我智十はうも真なるは野の  
ちもんとぬるは誠の十はうと見え衣袋も  
見えあはるをて大勢の故と違ひし本戸  
口でのたて違ひゆく来り故とが刀の三の  
は尻突いたみく **三** 本戸を押めらへ  
と入と大の字なりふ新なく丸投てあそ  
のけに伏するはひぞぬく侍似合ぬ刀の投  
突とすもも流ぶりの玉とよみあす無刀にて  
あはれも知れぬあ仕うと不覚候と見え  
ま **廿中** 知むくの女抱てふ丸投は儀と

あはれはよくは所へ行致を切しして前へ  
ゆり又者のあて切抜れぬといはくあり  
ま **廿** 二見月古希のお湯と成八百  
屋を思ふは不之申のいれやうに七まふ  
は有八百屋の口にて真女は屋下りい進  
るまひつよく大をぬくまはるまうまあ  
屋のまく小車高があそ見者のおはれぬ  
尺おもほすしと二尺小あまうくしひの  
著申すれとちと二尺お等二尺めかつ女  
大のう **陽** 有月程を本屋回を合つてあ  
男と小世衣袋持の外申すのを困心で  
あつて控へ直進をいれがのみまかみ  
ゆきまのりちがひのうたつたこのおは  
くしと見えあはれとあひあはれをして  
むせとあはれとあはれと廓をけ出しく

尾川戸へ行くお附のあいの女八を置く  
柱八親兄の歌と宮七の歌と舟の上のふれ合  
りて葉とふたのうき雲をせよ夜衣を  
よふくくさ故くもの和作中踊も舞の外  
は上子の恋まじりも面白く二夜はか娘はま  
つを恋とふ一先んはあひ舞子の寝付るを  
けしは月舟のあざうらみ先づりの花やう  
岩子由あの理ひとあうく尾上おの忠  
義をかんじ小鳥が不義とあうとふと湯  
の仕り香のあざうら夜衣と成てあこ  
が系とて五やうり美衣と出のふと二どん  
目かあは嫁入のゆえんか月おとく

上上書

佐の川に妻

上上書

尾上お七

ひらぬあまの雲評い系史改の巻にて  
仕りませう

上上書 中村東翁 中村を

ひらぬあまの雲評い系史改の巻にて

はれともおわがむさう外は外は外は外は

してせぬくも松を対面の上く

旅かかきおとせし二を計器の石安

公向のそつゆり二夜はかきしは庭の

雲をけりてあはれしをくも雲を

雲をけりてあはれしをくも雲を

似せぬのあはれしをくも雲を

あつたをくも雲を十板床を石坂を

二を自長と云ふ二を雲を菊水巻を

師承二を雲を二を自の七くあを

石外の御元大門口雲を岩を治アを

加茂の及ぶまゝを鳥玉をてきた人の証  
みせ給ふなりぬぬりいふにて懸つた  
ちて死なまてその君のそと女はたを  
は若君の美意違者の格骨をけりけり  
うりと血軸の書けしと高島をせ及ぬ人  
足程及るほどの及外若君のつたを  
いひのどひてく二女を仲合ぬあま  
ては外

上上士 中村 中村

十月廿八日候と書あり  
おきりぬ及ぬあまのつたを  
おきりぬ及ぬあまのつたを  
おきりぬ及ぬあまのつたを  
おきりぬ及ぬあまのつたを

君の及ぬあまのつたを  
この及ぬあまのつたを  
おきりぬ及ぬあまのつたを  
おきりぬ及ぬあまのつたを  
おきりぬ及ぬあまのつたを  
おきりぬ及ぬあまのつたを  
おきりぬ及ぬあまのつたを  
おきりぬ及ぬあまのつたを  
おきりぬ及ぬあまのつたを  
おきりぬ及ぬあまのつたを



袂立婦かゝると嫁をさう二夜は侍うる女  
後でまご新水丈二世代若原と吉田と春と  
後と免らるる改後その初夜をさるる松を  
改めて由島松出下りのつと免れ侍して何とや  
のこ團太を介介は正[正]女物のすまひ  
附家戸下その惜みののや改後つと免れ  
さるひよく勤く出下りにく初夜をせま  
の暮せりよと肩衣を足てふ人のよめ歌の  
及びとさるるおられお弁と又と足外さ  
文はとまのたて様で足とお流し悦びみえ  
づりのまぐ小尾上のお宛のそと女の若原と  
若原はあとのせりさは上とあをさるる足おへ  
のさるる改後ひよくことお初をさるる改後  
はづり改後ひよくさるる免れお改後足送  
の潤おひよく免れお改後お改後ひよく一里  
塚にてさるる常とさるるそと人のことお初夜の  
足兼火遠んは附改後若原と足お改後  
別倉のよその附はお改後ひよく改後ひよく  
上上正 〇 芳沢いろは 中村  
改後若原と改後ひよく改後七月お改後  
お巻林の太付様とお免れよく若原と改  
改後ひよく改後ひよく改後改後ひよく改後  
月お改後ひよく改後ひよく

上上正 〇 中山 龜三郎 赤田

改後ひよく改後ひよく改後改後ひよく改後

うい三夜ひよく改後ひよく改後改後ひよく改後


お改後ひよく改後ひよく改後改後ひよく改後

二夜お改後ひよく改後ひよく改後改後ひよく改後

と舞の亦休や清らりの踊ニやかしづ  
縄のそ終よく二見月おと七糸娘見や  
才一人かよく愛ぶ所中として面白く足  
おもしろび非

上上十  尾上紋三節 中村彦

辰之 大和倉の正徳の川吉と上達後村に於  
依りて此物語と二見月おと七糸娘見や  
こと忠臣義兵抗弁二夜終るる昔中村彦  
本の大徳を流田をて男正の源と忠義  
とせ中村彦の取り志賀城生約女大  
で死く


上上  岩井糸三節 中村彦

辰之 大和倉の正徳の川吉と上達後村に於  
王丸強よく二見月おと七糸娘見や  
辰之 大和倉の正徳の川吉と上達後村に於  
辰之 大和倉の正徳の川吉と上達後村に於

辰之 大和倉の正徳の川吉と上達後村に於  
辰之 大和倉の正徳の川吉と上達後村に於  
辰之 大和倉の正徳の川吉と上達後村に於  
辰之 大和倉の正徳の川吉と上達後村に於

上上 回 市川信彦 中村彦

辰之 大和倉の正徳の川吉と上達後村に於  
辰之 大和倉の正徳の川吉と上達後村に於  
辰之 大和倉の正徳の川吉と上達後村に於  
辰之 大和倉の正徳の川吉と上達後村に於

上上  下 長巻之助 中村彦

辰之 大和倉の正徳の川吉と上達後村に於



い荒る海の根元ニ奉りの池に上も大  
ちのちの中一島の長根流を足て元ん  
の二後後徳教の岩根をいぢくやむよ  
り命をぬと死者をい味方とせとの事略亦  
とて言てくち命をいせは後も後言とて運  
赤根血赤根をいせの事せ後をいしはうら  
夏ともく平氏門が来由のむねの事後言  
根の首打勝たれにせむさひく後言の事  
元年大田の大根をい元月五と二橋りの  
せり上家の事多めを今人のむねをいり  
成て赤根をいせむをいせむとて赤根  
根とわがうらぬお向ひ尾張や三河をい  
三人をい合の口とてい

上上士 圃 市川宗三席 赤根

原五條もあつて敵役老切の親玉運後をい

友と二後言びらのあにをいかむは後言の  
たん言根をい傳八男とてかむと二後トあ  
づももるのうと見當兵とせはア大輝  
強く二後言志の強しは仕と二後言の  
二えりの二大後言の若くは根と敵役の大建者  
見おとふくといひまの

上上士 回 市川三席 赤根

原五條もあつて敵役老切の親玉運後をい

運後の外にたつ二えりめかや後言の事大田池  
二えりめと七言根をい言又者中今川  
傳根をい言せてもいこ二言村をい言つ  
上人佐もりの男とてい大あり赤根とせ  
の事村をい言多田の後言二後言後次  
二運月志づくの場位がふりや

上上士 回 市川女義 赤根

原五條もあつて敵役老切の親玉運後をい

以六 市川氏の歌伎の老幼者好遊云々  
為二元月より局達の事後、其半信原迄  
伴作當兵とせし森田氏由勅むりて地主  
と成り及下り割後すこく二五月三日  
大徳の程のちありし

上上士 相鴻俊太郎 木次田を

以六 大徳や夫の運後、大徳宗益漢其破  
平平二元月より其の久き立大カ仁平  
其後其の久き河原の女作二役  
其振川和事大ニ役及び女作とせても  
石舟の就玉當兵とせし中るふび女と  
下れし

上上書 市川おのゑ 中村を

以六 歌ねたへも我々女中より二元月  
月忠々女がり連の写後、沖の井十帖  
源氏のおや二夜お枝菊水巻沖沼云々  
めありの神大門口邊、流波振つづれも  
はく當兵とせしとさうと成あり  
ありし

上上書 山下万作 中村を

以六 元月の暮天の當兵とせし定座と成  
節吹時之山城とのたてありし  
上上士 山崎 中村を  
以六 元月の暮天の當兵とせし定座と成  
元月より其の久き山崎の女作  
とせし中村を由勅二建目の由り二元月  
より人々ありし

上上士 吉書 中村を

以六 元月の暮天の當兵とせし定座と成  
のおふと依り死、局後二元月の由り

忠長が九右衛門の大徳と書西兵とせし  
山口の冠者よりの子孫がうまひしく  
二夜り不後りの事ふし作す所の外  
市出情目おとく

上上十 山下八尾 坂東三津三 中村左

改元 信濃守の上がこの故も苗字も名も  
すてい愛の成政名なぐおむの成後振分  
ら入る松久復更二夜月鳴かせ道の家後  
おころ十惟源氏おのりる果あ巻玉川二ふんり  
お今白石おん送大口強果おひ書西兵とせ  
とくし二夜中が死見やうく

上上十 市山七巻 中村左

改元 秋の市山七巻小友を三夜月首  
此之匠の家後思つらむ竹儀平二夜お竹  
果あおと改二夜月十巻大口強安田が女  
が書西兵とせ民ア二夜つらふんく

上上十 山嵐 新 平 中村左

改元 改田房夫逢後仁田屋二夜荒井和  
女儀ふ松久他書松家の八門書西兵とせ中  
村左由なり平有書二夜お女中ころん  
て死やうく

上上十 荒井七三郎 赤田左

改元 富田屋大の書松小友太二夜月おうぬ  
信く信は九二夜おを後太忠長がる在書  
書西兵とせ書田屋由助左を右二夜おは  
公たて死く

上上十 中村敬義 中村左

改元 中村我八月廿八日の改にて月廿九日  
より改勤書松久烟友おたへんがりの二夜二  
夜月松屋新と信く改せ書西兵とせ

とて人定かたより暑中平次登る例に  
岩木より岩田島とせ小太郎とりの下はじこ

上上平 中山平 中山平 中山平 中山平

既九中山氏ハ勇武及色色全三三三見  
精利九す大書り後り記が事二重り八  
屋のり女長と付内ひる各の持はる書

上 上 上 上 上 上 上 上 上 上

既九 築地先生の運海と係入漢書抄とる  
三島二五の女男王夜中作女強く當

上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上

既九 紀伊島に小僧三三の女物と  
大門懸かもの後室三三川魚り強く

上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上

既九 半島とせ中村産肉助の木の村又次三夜  
出ひろ大とく

上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上

既九 縁や夫の妻不く出助の事  
上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上

既九 赤松産肉男王とていふ書島とせ  
大とく

上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上

既九 十月十日百六返りくすく島とせ  
二七月由公助奴房平二返武島とせ

上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上

既九 山下成ハ三月狂多中村産肉下り  
写巻たつと十帖原とありひめ桑あり

上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上

既九 山下成ハ三月狂多中村産肉下り  
写巻たつと十帖原とありひめ桑あり

上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上

既九 山下成ハ三月狂多中村産肉下り  
写巻たつと十帖原とありひめ桑あり

上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上

既九 山下成ハ三月狂多中村産肉下り  
写巻たつと十帖原とありひめ桑あり

上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上

既九 山下成ハ三月狂多中村産肉下り  
写巻たつと十帖原とありひめ桑あり

上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上

既九 山下成ハ三月狂多中村産肉下り  
写巻たつと十帖原とありひめ桑あり

上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上

既九 山下成ハ三月狂多中村産肉下り  
写巻たつと十帖原とありひめ桑あり

上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上 上上

是利の息女二元月お竹大門進小ふ下御  
しくお宮とせ取休とめさす

上上 小川を太郎 赤田在

元月 達夜にうらや侍三夜程を文と男と之  
井首やお宮とせお宮と成五建月の建の  
内切有

上上 沢村波入郎 赤田在

元月 嵩島とせお宮と成の山と二夜かく  
火光あり

上上 岩井梅若 赤田在

元月 達夜に早の井浪と成の山と二元月お  
その五夜をのふき取男と成みさかのあて死  
す 嵩島とせお宮と成二夜小を赤田在

上上 市川徳三郎 赤田在

元月 嵩島と成お宮と成の山と二夜かく  
お宮と成お宮と成お宮と成お宮と成

元月 嵩島と成お宮と成の山と二夜かく  
お宮と成お宮と成お宮と成お宮と成

上上 坂东大入彦 中村在

元月 嵩島と成お宮と成の山と二夜かく  
お宮と成お宮と成お宮と成お宮と成

上上 中村春之介 中村在

元月 嵩島と成お宮と成の山と二夜かく  
お宮と成お宮と成お宮と成お宮と成

上上 坂东大友 中村在

元月 嵩島と成お宮と成の山と二夜かく  
お宮と成お宮と成お宮と成お宮と成

上上 市川徳三郎 中村在

元月 嵩島と成お宮と成の山と二夜かく  
お宮と成お宮と成お宮と成お宮と成





席八束後天八八及らうんづきとも  
づりやう

そ外の流中ハ口の目録に記す

上 下 市川集を席

此は中村松江の書で今中流の事と  
此たのこ中上中流

▲五巻袖

本上吉 〇 行景任たつ 赤田

此は... 中村を  
にハ流下つてムリ升

功上吉 〇 助も座も助 中村を

此は... 天正十一年三月の事  
連有老幼の事人多岐形たつ二や時改

三及宗信... 此は... 此へ運寫後... 此は...

此は... 此は... 此は...

此は... 此は... 此は...

此は... 此は... 此は...

此は... 此は... 此は...

此は... 此は... 此は...

此は... 此は... 此は...

此は... 此は... 此は...

此は... 此は... 此は...

此は... 此は... 此は...



五日小も日迄のしくおれ連中各々  
ませりりくのおれおひまの候と  
あや暑中湯治の及し中へおれ  
このも人や涼風のあつたおれ  
の暑気休着板のあつたおれ  
あつたおれのあつたおれ  
休すおれおれのあつたおれ  
はくあつたおれのあつたおれ

千重萬歳樂叶

作者 自笑

文化十一年  
戊正三吉也

八文字屋公家門  
河内屋太助 板元

板元東西く三がま若物後若藤云定  
評判記之爰較年米流布つて  
必お道比具買之少流米  
之ふ評判記何れおれおれ  
年々格別おれおれ改  
件勢尾張場おれおれの  
とせおれおれおれおれ  
至極おれおれおれおれ  
おれおれおれおれおれ  
おれおれおれおれおれ

江戸 寺町十日  
名吉屋 寺町十日  
系於 寺町十日  
大板 寺町十日  
心持屋物所  
河内屋太助板



春好亦書  
春好服乃切子  
右牛屋八郎共書  
四冊

猿奥門出乃諷  
おまふの侍言書の根本  
さいりさ入  
三冊

つづひし螺  
和岡大八矢教の根本  
六冊

箱根初花  
いとまの侍対の根本  
八冊

松好亦似  
松好はあし  
築紫の権二日記云  
五冊

三都俳優直跡手鑑  
役者用文章直指箱  
式冊

増補哉坊つ鏡  
四冊

此書ハ二枚芝居れ初りたる年々は様子れり  
くさひのふたふたの役者子依芝居近役志高の役付之  
芝居の茶やけは又付并に打掛は役者最上り所付  
年中約事屋云茶の名人を由縁云近來御統云

役者一口高  
三冊

大芝居中芝居子依芝居中をの位付る  
師弟系出と

